Ｑ：物語文の指導の際に，子どもたちが物語の中に入り込めるような授業をしたいのですが，「気持ちを考える」だけで終わらないような授業の展開について教えてください。

Ａ：国語科の学習では，学習指導要領の指導事項を，言語活動を通して指導することとされています。指導事項は，「子どもたちに身に付けさせたい能力」と置き換えることができるでしょう。「子どもたちが物語の中に入り込む」ために，どの能力を身に付けさせ，そのためにどんな言語活動を位置付けるかを考えて授業を組み立てていきましょう。

アドバイス：

①「単元を貫く言語活動」を位置付けましょう

「単元を貫く言語活動」とは，指導過程の各段階で「ここで話し合う」「ここで書く」「ここで音読する」といったバラバラの活動ではなく，単元の始めから終わりまで一貫する，中心となる言語活動のことです。例えば低学年で「読書交流会で好きなところを紹介する」という学習を，単元を貫く言語活動として位置付けたとします。すると，好きなところを見付けるために，「登場人物の行動や会話・心情の変化に注目して読む」「場面や事件の時間的な順序・事柄の順序をとらえて読む」「好きなところを紹介する上で大事な言葉や文を書き抜く」などの学習活動が見えてきます。これらを踏まえ，単元構成（指導過程）や授業展開を考えていきます。

②主体的に読む過程を重視して指導しましょう

質問にある通り「登場人物の気持ちを考える」という読みだけでは，様々な言語活動を実際に展開していくことは難しいでしょう。そこに文学的な文章を扱う際の物足りなさを実感するのだと思います。「子どもたちが物語の中に入り込む」ためには，より主体的に作品とかかわり，思考や判断を求めるような読み方をさせていくのが効果的です。例えば，低学年では「物語のお気に入りの場面を意識して読む」，高学年では「自分の心に強く響いてきた作品のメッセージは何か，自分は作品のどこに関心をもったのかを意識して読む」など，主体的に読む過程を重視していきましょう。

③読書活動を重視しましょう

国語の教科書を見ると，単元の終わりや巻末にその単元に関連した図書紹介が非常に充実していることが分かります。国語の学習においては一つの教材だけを詳しく読みながら学習を進めるのではなく，複数の本や文章を様々な方法で関連づけて取り上げ，多読につなげることが求められています。文学的な文章であれば，例えばシリーズ作品や同一作家の作品，同じテーマ，ジャンルの作品などと関連を図ることができます。他作品と比べて読んだり，重ねて読んだりすることで，その作品への理解をより深めることにもつながります。

※　言語活動は，身に付けさせたい能力の育成を十分に実現するためのものですから，最適な言語活動を選ぶ必要があります。例えば「場面の様子について想像を広げて読む」能力の育成を目指す場合には「紙芝居と音読」という言語活動が，「登場人物の行動を中心に想像を広げて読む」能力育成には「物語を演じる」や「人形劇」などの言語活動が適しています。